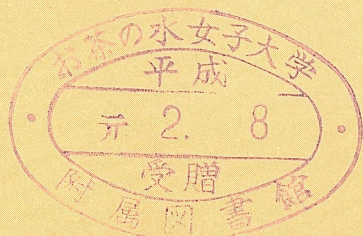


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

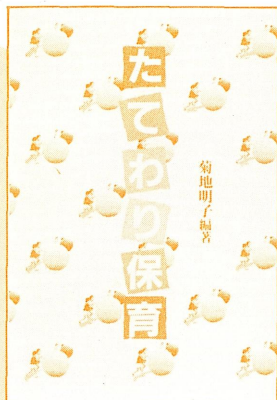
1989 3



第88巻 第3号 日本幼稚園協会

たてわり保育

定価1,600円
B6変型判・288頁



菊地明子編著

菊地 明子 編著



異年齢児保育形態による、たてわり保育の考え方と、その試みの実践例をまとめたもの。普通の同年齢児保育・一斉保育形態の中での異年齢児交流、インフォーマルな保育の中での工夫の例など多数掲載。たてわり保育を固定的に考えるのではなく、保育のねらい・内容によって柔軟な保育形態を考えるのに役立つ。



渡辺 明 著

保育者が、「園の主人公は子ども」との視点に立っただけで、こんなにも園生活の姿が変わってくる。子ども主体の保育をめざしたある園の変貌のレポート。



渡辺 明

子どもがつくる

— 仲間とともに育つ幼稚園 —

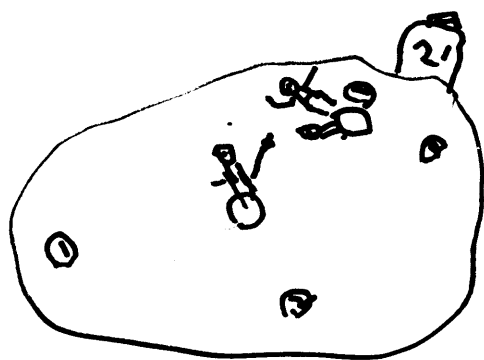
定価1,300円 B6判・234頁

くわしくは、フレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

幼児の教育



第88巻 第3号

幼児の教育 目次

—— 第八十八巻 第三号 ——

© 1989

日本幼稚園協会

△巻頭言▽

「思い出の記」——要領をめぐって……………日名子太郎…(4)

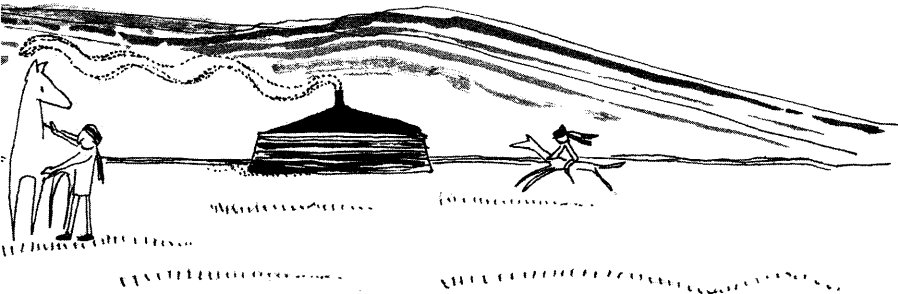
ヤヌシュ・コルチャック……………津守 真…(6)

保育の原点を探る

倉橋惣三「保育法」講義録(三)……………土屋 とく編…(15)

子どもと(12)

はる、そして巣たち……………清水 光子…(31)



Aちゃんのこと……………伊集院理子…(38)

イギリス便り

立教英国学院の子どもたち その2……………小野 英子…(40)

自然保育……………柳瀬 恒男…(47)

若いお母さんたちへ

日常の中から……………はるにれの会 大沢 啓子…(55)

表紙イラスト・津守 たたえ

扉題字・堀合 文子

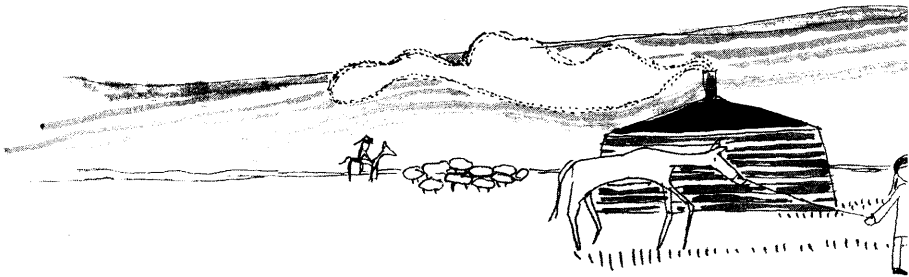
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園児

カット・福田 理恵

編集委員・本田 和子／村山 英子

上坂元絵里

編集部・向山 陽子



「思い出の記」——要領をめぐって

日 名 子 太 郎

昭和三十年来、久方振りに幼稚園教育要領の改訂が行なわれ目下各地において学習会が開かれてい
る。来年から実施とのことであるから実に二十六年
ぶりの改定ということになる。

戦後間もない昭和二十三年——つまり四十年前
に、文部省は故倉橋惣三、山下俊郎氏やヘファナン
女史らによる『保育要領』を刊行した。この年は私
ごとではあるが現在の住所に筆者が栄光幼稚園を開
設した翌年にあたる。この幼稚園は「保育とは、子
どもを愛することに始まり、科学的な方法に導かれ
て子どもを愛することに終わる」というモットーの

下に、次の三カ条を順守するものであった。

- 一、国籍を問わない。
- 二、親の職業を問わない。
- 三、子どもの障害の有無を問わない。

さて、その『保育要領』は、保育所についての記
載もあり幼保相互の連携もかなり密接なもので、幼
保一体の思想にも発展できる性格をも含んでいた
が、幼稚園の教育的性格を明確にしようとして、昭
和三十一年に『幼稚園教育要領』が刊行されるに及
んで文部省は幼稚園から一氣に「保育」という言葉
を抹殺しようといわんばかりに教育づいてしまい、

さらに私立幼稚園団体の猛反対を押し切って「領域」という新概念を強引に導入した経過は、それを知る当時の生き証人の一人として忘れることはできない事件であった。

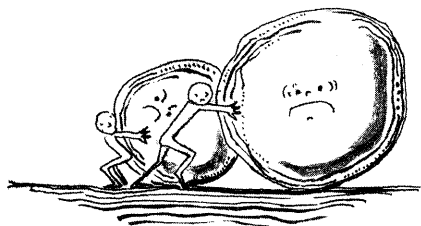
そのような無理押しを忘れて、今回の新要領で「実際には、このような領域の性格が十分には理解されず、△中略▽幼稚園教育にふさわしくない実践が行われる傾向もみられた。」とあるのは自己の罪を他になすりつけたようなもので随分と厚かましい言い分であると思う。しかも、「領域」についての注意は昭和三十九年の改訂ではさらに簡単にしているのにいたっては全く話にもならない。

このように要領の変遷をたどると幼稚園教育を誤らせた主な責任は、現場ではなくてむしろこのような誤解を招くようなお粗末な要領を作成した文部省並びに委員にあるといつてよい。したがって今回の改訂がまたまた幼稚園の進路を一層誤らせるのでは

ないかという危惧の念をぬぐい去ることができないのは筆者のみであらうか。

それとともに、このような要領の刊行を自ら求めたり是認してきた、数値的にも幼稚園をリードし、その性格からも本来自由であるべきはずの私立園の現在の在り方にも先輩の一人として奮起と反省を望んでやまない。

(玉川大学)



ヤヌシュ・コルチャック

津守 真

チェコスロバキアの首都プラハで、OME P（世界幼児教育機構）の理事会が開かれたとき、私が出席した小委員会の席で、戦後四十年間の幼児教育の歴史が話題になった。

一九四五年に第二次世界大戦が終わったとき、戦争で両親を失った子どもたちが、ヨーロッパでも巷にあふれていたことをこの小委員会に出席した人々の多くが直接に知っていた。今回出版された「OME P最初の十年の歴史」(The First Ten Years 1946-1956)は、その頃のことから記されている。それから一九六〇年代、七〇年代の世界を風靡した知的早期教育論の時代がきた。それは実践者にとっては周縁のことでありながら、実践の場は揺り動かされた。私の世代の人ならばたいがい知っているベライター・エンゲルマン方式などに話は及びながら、英国、カナダ、アメリカなどの人たちから、その風潮の中でも実践者は人間を育てる仕事を地道にやってきたことが次々に語られた。そのとき、ポー

ランドのシコルスカ女史が、教育では情緒の教育が基礎になるのではないかと前置きして、ポーランドの小児科医であり教育者であったヤヌシュ・コルチャックのことを話しはじめた。彼の著書は、ヒューマニズムに貫かれており、現在もポーランドの教師や親たちに広く読まれているという。彼は戦争中、ポーランドのユダヤ人ゲットーの中に住み、子どもたちのために働いたことを、ゆっくりとした英語で、頬を紅潮させてシコルスカ女史は語った。その情熱的な話に私共はひきこまれ、次々に質問し、小一時間の時が過ぎた。彼はいつ死んだのかをたずねられて、シコルスカ女史は言葉を濁した。いま思うと、彼女はそれを口にするに耐えられなかったのだと思う。私もいろいろと質問した。

帰国して一月半ほど経った十一月の末、シコルスカ女史から二冊の書物が私の学校宛に送られてきた。一冊は、マレック・ヤウォルスキー著「ヤヌシュ・コルチャック」*で、この人の生涯を記した伝記である。もう一冊は、「ヤヌシュ・コルチャック著作選集」*である。七〇〇頁に及ぶ布製表紙の英訳本である。保育の現場にいと、子どもたちとの実際の生活とそれを考えることで精一杯で、本を読むエネルギーが残らない毎日なのだが、私はこの本を手にとって頁をめくっているうちに、思わず読まされてしまった。こういうわけで、今回はこの書物を紹介しようと思う。

「ヤヌシュ・コルチャックの出生の日も死亡の日も正確にはわからない」という書き出

しから、伝記ははじまる。彼は一八七八年か九年の七月二十二日に生まれ、一九四二年の夏にナチの強制収容所で死んだ。伝記には次のように記されている。

「八月五日に、彼は彼の孤児院の子どもたち及びスタッフたちと一緒に、ワルシャワのグタンスク駅の引き込み線から汽車に乗せられたことを私共は知っている。そこから出発した汽車はすべて同じ場所に向かった。トレ布林カ第二収容所である。」(P. 7)

コルチャックは医者であつたし、逃げようと思えば汽車に乗らないですんだ筈だつた。

「しかし彼は、彼が世話をしていた子どもたちと共に死ぬことを選んだ。」(P. 10)

この簡潔な記事にすでに多くが語られているが、もう少しこの伝記によって彼の経歴を付け加えておこう。

ヤヌシュ・コルチャックの両親は、長くポーランドに住んだユダヤ人だったが、宗教(ユダヤ教)については熱心ではなかつた。彼の成長期にも家庭の中で宗教は重視されていなかった。血筋ではユダヤ人でも、文化的にはポーランド人だつた。彼は医学に進んだが、演劇の脚本家になることも志していた。実際、彼はいくつも脚本を書き、そのいくつかは上演もされた。また少年のため文学作品も書いている。教育に関する著作も文学的味わいがあり、英訳も難解である。ヤヌシュ・コルチャックというのはペンネームで、本名はヘンリック・ゴルドシュミットという。

伝記には、コルチャックが医者から教育者になる過程を、日記や著書を引用しながら詳しく記す。

「医師として、私は症状をみる。皮膚の発疹、咳、熱から……私は症状の奥にかくされたものをさがす。教育者として私は症状を観察する。笑み、恥ずかしがり、泣き、あくびをし、叫び、ためいきをつく。……怒ることなしに私は症状を確認する。……ときによって一見何でもない小さな症状がはるかに重要なことを物語る。医者として教師として、詳しいことは分からないのだが、偶然のようにみえ価値のないようにみえるすべてのことを熟視し観察する。」現代流にいうならば、現象の中にすべてがあらわれるという考え方もいえる。教育の実践に共通のことなのだが、医師と教師とを対比することによって明瞭に述べられている。

一九〇九年、コルチャックはワルシャワ市内の一孤児院の長となった。その後の彼は、子どもたちの中で生活しつつ考える教育者となった。ヤウォルスキーによれば、「彼はできあがった教育理論を実践に移したのではなく」子どもたちの中で生活しながら「ひとりひとりの子どもの状況に合うように理論を創造しつづけた。」コルチャックの著書を読んでいくと、彼がそれぞれの子どものをよく見ていることに驚かされる。そしてそのことが彼の理論となっている。「こうして、十九世紀から二十世紀へと時代が移りかわったとき、ヘンリック・ゴールドシュミットは、医師、ソーシャルワーカー、文筆家、同時に保育者であるヤヌシュ・コルチャックに変身した。」(P. 36)

ここで保育者と訳したのは、ポーランド語の原文では「Wychowawca」という。そのことについて著者の注に次のように記されている。「この語は、英語に慣れた耳には奇妙

に聞こえるだろう。このポーランド語は翻訳することがむずかしい。その内容は英語圏にも存在するのだが、いまだ名前を与えられていない専門的仕事を指している。Wychowawca とは、子どもを育てる人であり、専門的責任を負った者として子どもの身体的社会的発達を配慮する人である。彼は親ではなく、教師でもない。しかし、その両方の機能を果たし、支える者である。必要に応じてそのいずれにも代わる者である。」まさに日本語の保育に対応する語といってよいのではなからうか。

彼の主著のひとつである「いかにして子どもを愛するか」（一九一九）は、百十六の小節より成る教育論集である。彼が四十歳になったばかりのころの著書であるが、その透徹した子ども観、教育観に私は驚嘆しつつ読んだ。

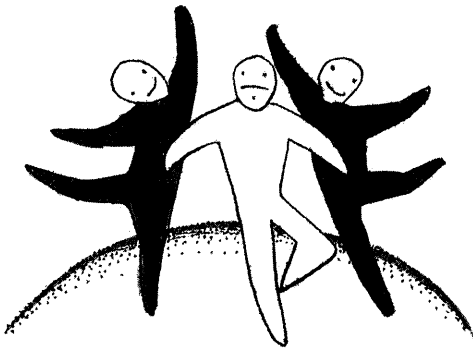
子どもはいっ歩き始め、話し始めるのがよいのでしょうかとの問いに対して、彼は次のように答える。「それはその子が歩きはじめたとき、はなしはじめたときです」と。「もちろんそれらが一般にいつ生じるのかをわれわれは知っている。育児書や教科書にはこうした小さな事実は一冊書いてある。それらは一般的にいつて妥当である。しかし、あなたのこの子どもにはあてはまらない。」（P. 127）コルチャックは二十世紀前半を生きた人だから、米国の児童心理学も新教育も知っていたと思われるが、教育の実際にあたっては、どこまでも実践そのものを重視していたことがわかる。彼は子どもを生命ある自然にたとえる。

「警察の規則によって養われた心をもって、生きた自然の書物（ともいえる子ども）に手

をのばす人は、頭でっかちの重荷によって心が混乱し、心配と失望と驚愕に陥るだろう」(P. 128)と彼はいう。つまり自然そのものといえる子どもを、観念的な期待や規律をもって見るならば、その大人は失望したり心配したりすることになる。更に、同じところでつづけていう。「われわれは二つの尺度を用いねばならぬ。ひとつは感受性をもった親に対してである。彼らは自然研究者のように振舞う。彼らは懷疑を承認し、推測し、困難な問題に直面し、そして興味深い質問をする。もうひとつは愚かな親に対してである。彼らは事務的な教師のようである。入門書に爪の先でここかしこ印をつける。『二時間おきに一匙、卵一個、コップ半杯のミルクとビسケットを二枚』と。(P. 128)

コルチャックは、子どもの権利について、三つのことをあげる。第一は子どもが死ぬ権利、第二は子どもが今日を生きる権利、第三は子どもがあるがままの自分自身である権利である。第一のこの意味は、子どもが大人から不当に扱われたときには、たとえば問題行動を起こす権利があるというように解していいのではないかと思う。現代の日本についていえば、登校拒否をすることもこの権利の中に数えられるだろう。彼はいう。

「白く塗られた部屋で、白いエナメルの家具に囲まれ、白い服を着せられ、白い顔をした子ども、白い(汚れていない清潔な)玩具を見るたびに、私は最も不快な感覚を経験する。それ



は保育室ではなくて外科の手術室だ。貧血の身体に、血の氣のない精神が発達する。」(P. 130)

第二の権利について、別のところで彼は次のように述べる。「子どもが死ぬことを恐れて、私共は彼から生を奪う。……われわれは前方のものを受ける準備をするために、今日の美を求めることを拒否する。明日には明日自身のインスピレーションがあるのに」と。コルチャックは似たようなことを各処に述べるが、私はこれは教育の本質にふれることだと思う。幼児のときから、大学入学、就職のことまで心配して、今日の美しさを見失っているのが現代の日本の姿である。何故に明日ばかり追い求める人になるのか。彼はいう。「われわれ自身が活性のない墮落した期待の中で育てられたから、たえず心を魅了するような未来へと急ぐのだ」と。つまり、人が自分自身に意味あるものではなく、外部の期待に沿うことに慣らされたとき、刺激的な未来をたえず求めるようになり、今日を生きることができなくなる。

「もうそろそろ歩いてもうよいのに、ことばをしゃべってもよいのにとは何とヒステリカルな期待であることか」(P. 130)と彼はいう。私は障害の子どもの世話をすることが多いので、同様のことをよく聞かされる。コルチャックは、これを親の自分勝手に感情的な期待だという。あるがままの子どもの現在を認めず、眼前の子どもにないものを期待するのが教育だとする誤解も、世の中にかかなり広く浸透している。子どもが今日なしうることをするのが教育の実際であるのに。

コルチャックの孤児院での少年達の集団の教育については、彼の面目の溢れた論説がいろいろあるが、ここではこの偉大な教育思想家のごく一部を紹介するにとどまる。

会議が終わってから、私はブラハのユダヤ人ゲットーを訪れた。ユダヤ人墓地の隣に、ナチの強制収容所で死んだ子どもたちの描画を蒐集した美術館があった。その事実だけで胸の痛む思いがするが、収容所で描かれたそれらの絵が普通の子どもの描画と変わらないことに私は驚いた。空に太陽が輝き、地面に花が咲き、家がある。収容所の風景を題材としたものも、暗さを感じさせない。この子どもたちは最後の日まで現在を生きていたからなのだろう。

いまコルチャックの書物を読んで、収容所の中にも、ここに記されたような保育者が子どもたちと一緒にいたのだろうと考えた。

ヤヌシュ・コルチャックの死をめぐることは、多くのことが伝説的に語られている。彼が子どもたちを引き連れて駅に向かったとき、幼児から十四歳の子どもたちと職員達は四列に並び、手に緑の旗を持って行進したという。緑は希望を象徴する。コルチャックはその先頭に立ち、いちばん幼い子どもを片手に抱き、次に小さい子どもの手をひいて歩いてた目撃者は証言している。

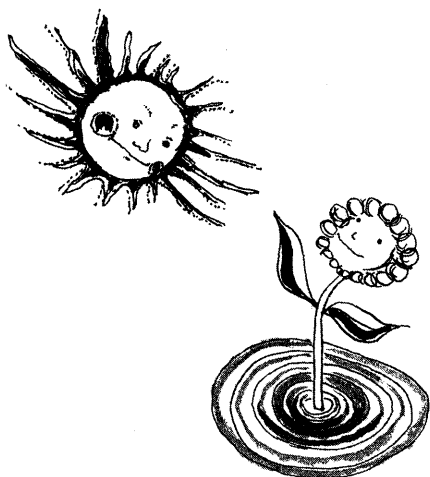
伝記作者ヤウオルスキーは、ヤヌシュ・コルチャックをペスタロッチに並ぶ教育思想家

と評し、彼の精神はポーランドにとどまらず全世界のものだと結んでいる。

* Morek Jaworski "Janusz Korczak" Interpress Publishers, Warsaw 1978

** "Selected Works of Janusz Korczak" Selected by Martin Wolins, Translated by Jerzy Bachrach. Available from the U. S. Department of Commerce, Clearinghouse for Federal Scientific and Technical Information. Springfield, Virginia, 22151

(愛育養護学校)



保育の原点を探る

倉橋惣三「保育法」講義録(三)

記録

田村 薫

菊池ふじの

土屋

とく編

一号記載

第一章 幼稚園

第一節 幼稚園の目的 第二節 学齡前の教育 第三節 保育の意義

第二章 保育方法の原理

一、自発性 二、具体性——幼児生活の特色と生活原理

二号記載

保育方法の原理 つづき

第三章 保育法の原則

一、間接（教育）の原則 二、相互教育の原則 三、共鳴の原則 四、生活に依る誘導の原則

第四章 保育方案

保育の原理、原則を基として、実際に入る。

目前的實際とも言おうか。

計画上の仕組みの上の實際が、保育方案である。幼稚園で全体的に、計画する案を立てる。それが保育方案なのである。

I、保育項目という事を考える。

根本から見れば保育方案は、全て保育の目的から発している事は、言うまでもない。

我々の日常生活は、人生の目的のためになされている事は言うまでもないが、それ程にまで根本に遡ることなしに考えれば、實際は日常の生活は仕事の為になされている。

保育も同様で幼稚園の方案は、実際には、その仕事の為になされている。

そのため保育項目が定められているのである。幼稚園の方案を目的から考えるのではなくて、保育項目から考えられている事は、確かである。故に保育方案を考える為には、保育項目を研究せねばならぬ。

保育項目を見ると、如何にも幼稚園と云うものが、その様な仕事をする為にあるという様な傾向がある。

同様にして小学校も、児童心身の為の目的が定まっているにも拘わらず、それが漠然としている故に、恰も学科を配する為に小学校がある様に考えられる。

少なくとも保育方案を立てるに於いて、保育項目にとらわれ易い弊が起こり易い。この点が、現代幼稚園の方案上の誤りの主なものである。項目あつての幼稚園のように感じている。

「項目」

手技、談話、観察、遊戯、唱歌、

保育項目の本質とは、

子供の生活の中、最も本質の現れているところの、遊びの中に本来含まれているもので、教育者が教育の目的の為、取り出して来たものではない。

手技、談話、観察、遊戯、唱歌、等堅苦しく云うが、本質から立ち割って見れば、子供の生活の中には入っているものである。

小学校の学課目も、その本は生活から来たものではあるが、その学課目の必要を認めて課するのである。

社会には文化というものあり、学問（科学）芸術がある。その中から子供の前へ、学課として取り出して課するのである。が、保育項目は文化から持ち出して来るのではない。

幼稚園の唱歌と云うものは、文化価値として持つて来るよりも、子供自身の中で自ら歌っているから歌わせている。

自然の生活を、そのまま持つて来る事が大切。斯く考へれば、保育方案も考えざるを得ない。文化中から持ち出すのなら、学校にも似た幼稚園が出来る。

そもそも幼稚園の開始者フレーベルは、この精神を多分に持っていたから、その名に「学校」という文字を用い度くなく、様々に考え、考えた揚げ句、キンダーガーデンと名付けたのである。

子供の生活する場所を箱とも、寺とも、況してや学校としない。

庭として自ら伸びゆく種を蒔いて、園丁の保母が伸びさせてゆく、それが幼稚園である。

学校は文化を持つて来て教えるのであり、幼稚園は彼等の生活をさせるのである。

故に、保育方案は、全く子供の生活をして出来る限り、發揮させる様につとめることが大切である。

保育方案の根本となるものは、幼稚園令に定められているが、方案の根本は項目にあらず。フレーベルは且つて、「幼き子を集め、自己活動を尊重し、遊戯に依り

幼児を教育する場所」と云ったことがある。

幼児をして十分に生活せしむる方案が欲しい。先ず第一に、幼児の生活を十分に發揮せしむる前に、妨げない様にする。他の目的で、どれ程よき方案であっても、此に違っているものは除かねばならぬ。

幼児の生活を十分に發揮させる為には、生活を妨げぬ為には、

1、幼稚園生活の全体を通じて自由と云う事が相当に許されねばならぬ。

自由をも更に考えねばならぬ。

自由主義、自由教育と云う語が、真面目に理論的にも用いられている。

自由とは本当は如何なるものか分からぬ。単に不自由の反対であつて、不自由の除かれたものを云つたものである。

自由とは、無限の永久の魅力を有するものではないが、相当にしばられた中にも自由がある。自由感はある

ものである。往々にして、感じる、その自由感と云うものを、豊かに感ぜしむる様にする事が肝要。

殊に狭い部屋の中で、きちきちした生活の中であつても、全体を支配する気持ちから自由感を感じられるか、圧迫感を感じられるかに分かつた。

教育は此方の計画をもつてなされるべきものであるから、全体の自由と云うものは得らるべきものではないが、その中に、子供の感じる自由中に自由感の無い自由と云うのがある。退屈、即ち之である。

自由感を持たせる為には、

2、設備の方面から考える事が必要なり。

人間の気持ちは、その置かれてある場所の設備で支配される。

自分で、自己の心を統制、整理出来る大人には大切でもないが、子供は実に左右される。

- ① 広い事
- ② 明るい事

が望ましい

③ 又室外を尊重する事。

。教育上の設備は、本来、学校本位にしていたので、校舎の設備にのみ留意していた傾向がある。

。室外を尊重する理由が、専ら健康上の事でのみなされている事がある。健康の為に、外を尊重するのは非常によい事には違ひはない。

幼稚園に於いて、庭を尊重するのは、幼児に自由感を充分に持たせる為の他の理由があるからである。故に明るい、広い庭を要する。

自由感の純真なものを起こさしむる為には、出来る限り、自然のままの環境に置く事が必要。之が自由感の上に主要な関係がある。戸外に於いて感じる自由感は、健康の為以外にも実に有意義である。

人為的に楽しくさせられるのとは、全然異なる。庭は全力を以て自然的に作るべきものである。

但し、以上の三点には、各制限のあるものである。

子供が自分の要求を満たし得る場所であると云う条件が重要なのである。

子供が自己の自由を如何に実現すべきかに就いて、非常に考えなくてはならぬ。無制限なものであつてはならぬ。

自分を妨げる何者もない。併し、自分を満たしてくれるものは何一つない。之ではいけない。

設備に余分に手をかけてあれば、設備に追われて子供は、活動させられる。

自己を充分に發揮して生活する事を、設備が助ける様な程度でなくてはならぬ。

幼稚園とは、その幼児の年齢に適切なる自由感を与える設備である。

都会に於いては、何でもない普通のものを得るのに消費する。

併し、田舎に於いては、特別な物を得るのに消費させられる。

II、仕組み

幼稚園全体の仕組みから出るものは、生活形態であ

る。自由感はこの仕組みによっても大いに左右される。仕組みの上から窮屈な感じを子供に与えぬ様にする。

自由感の充分に与えられる様な仕組みが欲しい。そのゆるみ、固さは、程度等で現せるものではない。形でもない。

之は保育をされていると云う意識を感じない様な仕組みが欲しい。

子供が仕組みの中に入れていっていると、意識しているか否か、先生の教育を意識しているか否か。

先生は全力を以て、子供を自由にすべきではあるが、子供は自分が先生に依って自由にさせられているのである等と感じては、不本意である。

この意識を、被教育特殊意識と云う。

自由とは外形のものではなくて、その人の内に入って見なければならぬ。

“仕事と遊び”

仕事とはしなければならぬと義務づけられていることを意識しつつやる。

遊びは、意識よりも生活の事実が先になっているのである。この仕事と遊びとの違いを論じる事によって、古くから被教育意識は扱われて来ている。

幼稚園とは、実際としては、遊戯が本体であった。けれど仕事もある。が、その仕組みがこの意識を感じさせぬものであったなら良いのである。

この意識は、次の様な場合に出る。

① 上から強く抑えられている場合

② 他は義務を口にして改めて意識さす。

③ おだて上げる事によって、義務をも、又意識をも自由感でなしているように、カムフラージする事ができる。

「我が物と思えば軽し傘の雪」

おだてるのは、自由感を起こさしむる事は事実だが、之は一時的のものである。真実に自由感を起こさしむる様にする実際の事としては、

幼稚園の実際として仕組みとしての中に、課業は無いのである。

幼児に業を課するには、弾力的態度を取るより他に方法はない。課業と云う気持ちで仕組みを行っているのは、自由感を起さしむる事は出来ない。

課業とは学課を課するものである。幼稚園には学課が無い。故に課業は無い。

学校では学課として課する事が仕組みの本体なのであるが、幼稚園に於いては課業の気持ちを持つ事すら許されない。

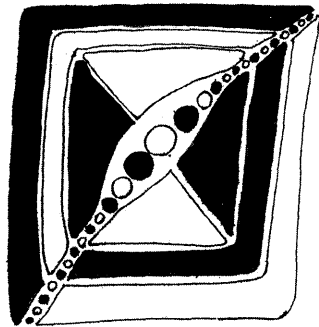
幼稚園の中に、稽古と遊びの区別が出来るものだろうか。

遊びとは自然的なものである。幼稚園の中には、課業もないと同様に、稽古と云うものもない。

稽古とは本当の生活が彼方にあり、そこへ行く迄の道程なのである。

幼児が何をするとも、その動作に表れたる真実なる生活を見なければならぬ。

稽古を一心こめて出来るといふ事は、本式にする時の為にするのである。即ち飯の事をなすに一心に出来るの



は、本当の時あるが故である。

人生には一時たりとも飯の事はない。そんな意識も持たずして生活させよ。

生活の形式の自由さは疑われる。絶対の自由と言えば、却って放任であって、それを或る程度の制限を加える。これ仕組みである。

課業、稽古ともに意識を抱かせる。又、之供に飯の生

活である。幼稚園に於いては、真の生活をさせ度い。

真の生活の起こりは、又、如何なる条件？

先ず飯の生活たるものは、その特色の主なる一として、

① 極めて偶然的な、或いは人為的なもので、その人に於いて何等の必然性を持たざる条件の下に行う。之は仮であるが故に、生徒は自分のなす事を知らぬ。予め時間割は定められてはいるのだが。

② その事に於いても亦、必然的な条件の下におかれていない。即ち己の今持つところの目的と結びつけてやるのではない。

その事を稽古としてなす時は、必然的な条件の下になされていない。今持つところの目的とかんけない。やがて何れ後に斯様な目的を持つ事もあらうかと、稽古するのであって今の目的ではない。

故に真の生活とは、その人その事が今の目的に於いて必然の関係がある。一般の学校に於いては、今は切迫性が乏しい。一般の社会人に見る様な真剣性が足りない。

即ち

1、生活そのものが、その人の興味に結び付けられている時は、その生活が真の生活である。真の生活は、中から興味湧くのである。その興味は、時、人、場所の境遇に依って異なる。

一般に云う教授法の巧みさというものは、飯の生活の中に入るべき。

課業、稽古を真の生活たらしむる為には、又必然的なものにする為には、それを生徒の興味と結びつけ様と努力するところより起る。

併し、幼稚園に於いては、その生活そのものから油然と興味の湧き出るところのもでなければならぬ。

2、又真の生活は、その目的が今の目的と一致するものでなければならぬ。即ち目的でなくてはならぬ。現在の興味に依り、今の目的に結びついていなければならぬ。

以上の二つに依って、生活の必然性を得られる。併し斯様に厳密なものではないが、幼児の遊んでいる時に

は、この通りなのである。

以上に出て来た仕組みを一般に、幼稚園に於て保育案と言っている。

従前に於いては、保育項目の配列、羅列であつた。配列そのものも大なる苦心のあつた事だろう。殊に、その保育項目の要目に於いては、子供の興味を考慮した事は勿論であつた。

その古い方法に対して、今まで考えて来た仕組みの原則よりすれば、むしろ興味を先に、保育案を立てて、此に項目を配当する。

興味が眞の本体として項目を配当する。

1、興味を本体として方案をたてるなら、おそらく季節と行事とが入って来る。

行事の中には、広くは社会的なものより、狭くはその学校当局のものもあろう。子供を取り囲む生活の年中行事である。

幼稚園に於いて、季節、行事は一年を通して、つまびらかにせねばならぬ。

各園は各々自分の園の季節的な移り変わり、又、行事を基礎とせねばならぬ。そしてその基礎の上に保育項目を、なるべく偏しない様に配当するのである。

行事、季節の上の生活的興味を利用して、眞の自然の興味を子供の中に起こさしめて、必然的の最も眞実なる生活をなさしむる様な保育方案を季節、行事を主体として考える。

子供でなくても、人の生活と云うものは、気候と行事に支配されている。

小学校に於いては学課と云うものがあり、その進歩の爲には季節、行事にばかり拘っていられぬ。だから学課をば生活的興味を起さしめる為、行事、季節を考慮する教授法が用いられるが、幼稚園に於いては生活興味を利用するのではなく、それを本体としてやっていく。

生活興味の満ちあふれている子供の生活を充実し、中身を一杯にする方案を考えねばならぬ。但し、この二つのみによってなされた保育は、原始生活に於けるもので、近代の文化生活に於いては他をも考えねばならぬ。

それ等は変化の多いものである。又、人間生活に仕事がある。

例えば、商売、学校、旅行等、社会施設であつて、季節、行事に支配される事が少なくない。殊に文明生活に於いては少なくない。企画されて行われているものである。故に人間生活の中心となつてゐる様々な企画を本としてなされる。

2、企画の特色としては、それぞれ目的を持つてゐるが、その場合その目的が或いは、そのやつていく道程の動きに、子供が興味を持つてゐるのかは分からぬ。子供が如何に興味を持つかは、目的と云う事から考え得る。前者は斯う考えたらこじつけである。全ての企画の有する目的の力を借りて、それを本として保育方案を作る。之をプロジェクトに依る保育案と名付く。目的性を基礎とされねばならぬ。

前者のは移り変わりがあるが、後者は目的が本体なる故に、その到達される迄は、経続される。

子供に継続せる興味を抱かせねばならぬ。

おもちゃ屋をプロジェクトとして作る。子供は、その屋台に氣を引かれるか、その売り買いに心を引かれるかは、わからぬ。おもちゃ屋と云うプロジェクトの中で、保育項目を凡てさせるのである。

季節行事よりも、却つて目的を本体とした保育の方が新しい。

第五章 保育項目

保育項目は、方案の根本となるべきものである。

幼稚園に於いては、決して項目が主でなくて、保育の為の項目である。

一つ一つとして児童文学、児童芸術として、又、児童科学として、それぞれ立派な文化的存在をもつて研究されてゐるのである。

幼児教育者は、いくらでも研究しうる。

昔に於いては、項目が幼稚園を支配するかの如くに見えた。今日に於いては項目を表立てずに、あくまで保育

を主として幼稚園があるのである。

組織されているものの一つ一つに重きを置くより、保育全体を主として幼稚園をやっていくのである。

現代保育の重要点は、ここにある。子供に絵を画かすにも、保育生活の一項目としてなされる。児童芸術ともされて、いくらでも研究しうる。

一、製作（手技）

手技とは作る事であるが、この製作と云うことを、教育的に重んじて来たのは、フレーベルの幼稚園の一つの卓見である。

併もその後に至り、その意識は、深く、強く主張されて来、現代教育に於いては、作業に依る、又勤労に依る教育等と云われている。

主張は、皆その根本に於いて合致しているものである。

而して製作という事が卓見であるという事が、古い教育が専ら、受け取らせる事、及び観念的な事に限られ

ていたのに対し、生活を生み出す事、観念よりも実体的なる事に、重きを置くところにある。

この意味に於いて、手技は、フレーベルの時代にも、今日に於いても幼稚園らしいものの一つである。而も亦これ程（手技）フレーベル以来、大なる変遷を経たものはない。

今日に於いて手技という字をさけて、製作と云う文字を用うるを欲している事も、その現れである。而してフレーベルは、作ると云う教育の真価を良く理解していたのであるけれども、二つの点に於いて誤りを犯していたのである。

1、その一つは、折角観念的でなく実体的であるべき、この教育に於いて実体に徹底せず、抽象の域を脱しなかつた。何故なれば、その時代、及び彼自身の個性の影響により、彼の教育が象徴的であつたからである。

Symbolic

○ 所謂思物は、その考えを代表するものである。

2、第二は、作ると云う事の生活的意義に対して、技能

的意義のある事は勿論であるが、当時の教育思想の程度に於いては、その技能的方面が尊重され、作る事そのことよりも作り方そのものに傾く所があった。フレーベルの時は、それ程甚だしくなかったが、後に甚だしくなり、幼稚園の一点とさえなるに至った。その結果、幼稚園に於ける手技は、技巧的となり、練習的となり、分解的となり、繊細的となり、作ると云う事の生活的意義から全く離れたのみならず、幼児の能力、殊に神経の不適当なる時に与えようとする有害なるものにさえなった。

手の技術にあらずして、製作そのものでありたいのである。

作る事そのものは、観念ではなくて、実際である。フレーベルは、作る事としては良くやって来たが、観念的から實際的に移るに至っては、徹底していなかった。その現れの一つが恩物である。

之は、フレーベルが子供を遊ばせる道具の一つとして、彼が考えだしたもの、言わば一種の玩具である。

が、彼にとっては普通一般にある玩具とは相違して、恩物の中に深い意義（味）がある。

云いかえれば、子供が玩具として遊んでいる間に、彼が子供に与え様とする深い宇宙の原理が、象徴的に伝えられるのである。

斯様ないわれから、Cave (Gift) と云われている。

恵みもの、賜物と云っていたのである。

例えば、恩物の中に積木がある。色々と切られている形が、立方体の箱に入れられている。

この恩物は、箱におさめては、又ばらばらに解くと云うわけなのだが、それだけである。（第四恩物）が彼は、総合と分解の原理を簡単なる玩具の中に象徴的に含めているのである。

明らさまに云わずに、裏に偉大な原理を隠しておいて、何となく会得させ様とさすのである。

露骨に云ったのでは、却って会得できないから、何物かに託して分かせ様とする。

又、第一恩物に六球と云うのがある。『まり』であるのに、宇宙の円満なる事を出した。

実にどれも意味深長なものである。

然るに、決して実体徹底せず、観念的、象徴的主義を取ったため欠点があり、あくまで彼を尊重する我々も、今は幼稚園に於いて、恩物を取り去る様になってしまったのである。

製作に二要素がある。

一に云えば、人格的活力である。製作者は、作ろうと云う意志を以て、全心を集中さす。が、意志のみで作るわけではなく、中枢から末端に至る神経の力によらねばならぬ。

斯様に人格的、生活的なる事と、神経的なるもの。教育的に考えれば、前者の方が重要である。

徒らに技巧にのみ捕われ、必ずしもすぐれた技巧に重きをおく事ではない。

作ろうとする心の動く事、作ろうとする心を生活的に実現さす事、作ってより満足を味わう事、之を主体とす

る。

作ろうとする生活力を養い、実現させていく力を養い、作ろうと思ったものをなし得た意志的満足を味わわせる、之生活教育である。

フレーベルは、之を意に容れたのではあるが、やはり徹底せず、技巧に流れてしまった。

器用、技巧に重きをおく弊は、弟子に依り、余計激しくなった。

魂の真価を見ずに、手先を見易い。

技巧を考えるには、練習がある。然し、幼稚園には仮の稽古と云うものは無い筈である。稽古の為に作ると云う意味で、技巧を考えたのでは駄目である。

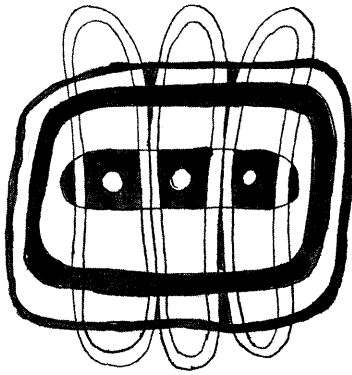
今日では、生活的意味から製作を考えている。昔に於いて、技巧主義なるが故に、殊に手技に於いて練習をやかましく云われたものである。物を作ろうとするには、全体でやってゆく。そして子供は満足である。が、昔は手技を分解的にすべてさせたものだった。切り方、貼り

方、折りかた、等に分析して練習をさせ、而して後、何物かに手をふれさすのである。

作ると云う混然たる生活の中に、全体を入れてやらせてゆくべきである。

フレーベルのやり方は（gift and occupation）という様な作業であった。

保育項目に相似せるものは、家庭に於いても、なされているに違いはない。が、幼稚園に於いて初めて教育的



指導のテクニックが生まれて来るのである。

作ると云う生活的意義を無視して、技巧に捕われ練習し、分解し、抽象的になり、子供にとっては、

① 本当の意味の面白さを味わう事が出来ない

② 保育原理の一たる具体原理に逆らう事にもなり

③ 又、小さな部分の技巧は、子供にとって神経を疲れさすものである。

筋肉の発達は、大きな部分より始まり、後に末端に至るものであるから、小さな手技と云う事は実に不合理な事である。

保育の本質に逆らうのみでなく、子供の健全なる発達に有害なものである。

幼稚園の手技は、小さく成り易い。という論が、殊にアメリカに於いて唱えられて来た。殊に幼稚園に於ける織紙の織り方等、細かいもので、又、抽象的に美しい対照的の美しさであって、くずれ、くただけると云う事が無い。

この美麗式と云う昔の幼稚園で唱えられたもので、フ

レーベルが言った語で、成立、組織と云う事に就いて、はつきりとした観念を子供に与えると云う事であった。

此は細かく対照的に美しくするのが要点であるのだから、実に不自然なものであった。

もっと酷いのに至っては、針通しがある。この練習主義・分解主義が斯くさせたのである。

幼稚園に於ける女性主義の弊害が、ここにも一つ現れていると云うべきである。

この二つは云うに及ばず、フレーベルの積木の恩物でさえもひどく小さいものである。

ここに主にスタンレーホール一派が非難し、繊細主義を脱せしめようとした。

作業行程上に分解的であるばかりでなく、紙、木、粘土等と物にこだわっている傾向もあった。昔の幼稚園に於いて言われたのは、紙細工、粘土細工等である。紙の細工に於いては、紙のみを、粘土の時は粘土ばかりを用いる。

① この様な中で作ると云う生活を尊重する為には、細

かくと云うのを、大まかでもかまわぬとする。

繊細が生活から離れるに對して、粗大を許す事は、生活に引き入れられる事なのである。

② 又、細工の材料を限定する必要はない。すべての材料を混合して用いるがよい。

粗大主義、及び材料合併主義を採って行き度いものである。併し、この二つは生活的にならうとするものの、妨害物を除いたもので、生活的にする要素とまでの積極的な意味は無い。

作ると云う事自身としては、粗大で許さるべきものではない。

之が根本ではあるが、幼稚園に於いて、それに捕われているは生活と離れてしまうから、之を主意にする事は出来ない。

幼児の作品は、よほど原始芸術に相似している。巧妙、器用、繊細、等に捕らわれていないからこそ、大胆で伸び伸びとした生命の躍動が見られるのである。

故に生活的になす為には、粗大でなければならぬ。

又、練習の爲には、分解的、限定的になる。生活に練習はない。だから道具も材料も限定、分離せずに合併混用する。

以上の二主義によつて、手技を生活的にする妨げをするものを消極的に除くのみである。

幼児に規則、限定を要求する事は生活的に障害を来す。故にその事は仕方のない事として黙許する事になる。

○ 幼児の製作、手技を生活的ならしむるに、積極的な手段を考えねばならぬ。

製作と云う事は、作らせられる事ではなくて、人類生活の中にあるのである。人為的なものではなくて、人間としての生活の中に作らなくては、いられない様な気持ちで作るのである。

人生には、作る事ばかりであるが、それには多く凡てが目的がある。文化生活はこんなものである。

人類生活の中の製作は斯様なものであるが、子供の生活的製作は、芸術的、及び産業的発動から起こるもの

で、体育的、況んや教育的製作であつてはならない。

吾々の製作の中には、産業的必要の切迫を感じていないものが少なくない。

幼稚園の子供に、製作を生活的にする爲に、産業的、芸術的動機から、子供が自分から作る様なものにした

い。
この事が、吾々の幼稚園に於ける手技の根本政策である。

ここに、芸術的誘導と、産業的誘導がある。が、この二つは、共に目的の方からいつているのではない。芸術を作り度いと思うのは、人間本来の望みである。生命は外面に表れるものである。

幼児の生命も、一つは單なる活動として表れ、他の一つとしては、單なる活動としてではなくて、或る一つの表現をしようとするものである。

——以下次号——

(川村女子短期大学)

子どもと
(12)

はる、そして巣だち

清水 光子

「早春」の「梅をちこち南すべく北すべく、幾つもの群が出来、だんだんと春めいて来る幼稚園の朝である。それにしても、どこから来る此の春の匂いであろう。」(『育ての心』より) 子どもと「春よこい、早くこい、」と待っていた春、「ポカポカ春がやって来た。」春が来た 春が来た どこに来たの リズムのように、また、ヴィヴァルディの「四季」の「春」の出だしのリズムの軽やかさに乗ってのように。コンクリートジャングルの谷間にだって、アスファルト道の僅かなやぶれの間にも日光は降りそそぎ、やさしい雨に時たま慈いつくしまれて小さな緑色が萌え出て来た。

「ね！かわいい花が咲いているよ！」と年少組のY君がとんで来ていうので行ってみる。花壇の隅に、まるで碧い瞳のような色のクロッカスが咲いている。「まあ、ほんと！」その傍にはこれも碧い小さな花がいくつもこちらを見上げている。「これ、大いぬ

のふぐりというのよ、猫の目草という人もあるわ。」などは言わずに、『育ての心』の「三月」のことはを繰り返して心にきざむ。「三月の春は早く子どもらに來る。一步一步近づきくる小さい春を、その時々一ぱいに享け、一ぱいに楽しんでゆく子どもらに。」

子ども達といっしょにお雛様を飾る。箱をあげると虫よけの匂いがして哀しい。でも、ていねいにやわらかい紙で包まれたお雛様が現われると嬉しくて、「ようこそ！今年もこうして子ども達とお迎えてきて、ほんとうにうれしうございます。」と心で話しかける。お雛様達も何だか晴ればれとした表情にみえる。「この人泣いてるの？この人は怒った顔してるね。」と段に飾りながらつぶやいているM子ちゃんの「使丁」のひなでさえも。

「うちのF子、ご存じのようにお人形遊びしない子ですのね。それがきのう幼稚園でお雛様飾りのお手伝いした、って話すんで、私が嫁入るときに持って來た小さなのをあの子と一緒に飾りましたの。」F子のお母さんから翌日報告があった。私、老婆も○十年前の粗末なのを我室の隅に飾って、

仕^{つか}つる 手に笛もなし 古雛^{ひいな}

松本たかし

そのままのを。そして、紙雛ではないけれど

紙雛や 恋したそうな 顔ばかり

正岡子規

と眺めている。

いきいきと 三月生る 雲の奥

飯田龍太

日に日に日足が伸び、雲が空が霞みめいてくる。「園丁雑感」で倉橋惣三先生は「春が来る」という題で「冬らしい一切の名残りを取除けよ。壁を払え、床を洗え、額の絵も取り替えよ、隅棚の装飾も取りかえよ。そして春を春らしく迎えることを忘れるな。」と言われ、なお「春が来る。どこからくる…(中略)…子ども達をしてこの春を迎えしめよ。この春と交らしめよ。この春に親しましめよ。」と。「外へ外へ」には「春風が誘いにくる。蝶々が迎えに来る。…(中略)…かぐわしく新しい野の空気と万人の浴するに任せて、与えて惜しまない豊かな日光と、皆これ子どものために備えられた自然の恩恵ではないか。何者の無情漠そこの好季においてなお子どもの足に足かせをする。…(中略)…窮屈な保育室の机・腰掛からつとめて子どもを解放せざる。何も屋根の下のみが保育の場所ではあるまい。…(後略)」単に物理的に床を洗い、壁を掃うのではないことは無論である。が、大人は兎もすると、学年の終わりである三月に心の落ちつきを失ってしまう。年長組に関わる保育者は殊に、巣立ち間近かな子ども達に愛しい、惜しい思いをつのらせ、

一日一日をいとおしくすごす三月なのである。

くれなゐを 冬の力と して堪へし 寒椿みな 花をはりたり

馬場あき子

小石川植物園への道、椿の花びらが散り敷いているのを拾って、ていねいに紙に包んでいるT子はやがて巣立つ子の一人。梅林を訪れたとき「あ、いつかこの木の下でおべんとう食べたね。先生、赤い花と白い花と匂いがちがうのね。」といったSも。

〃梅の蕾もふくらんで、もうすぐ学校嬉しいな〃とうたう修了間近な子ども達と湘南海岸へ遠足した。海水浴客に賑わう夏とは別の地のように、人影も少なく、僅かにサーフィンで遊ぶ若者の姿が見えるばかり。広々とした海岸を思う存分走ったり、砂山を作ったり、貝殻を拾ったり、パチャパチャと既に大分ぬるんだ海に入ったりして遊びに遊んで、おべんとうは流木を集めてのたき火を囲んでした。貝殻や、石ころや、ぬれたくつ下の入ったリュックを背負って乗った帰りの電車で、どの顔も、誰の瞳も輝いて、生き生きと充実感に溢れていた。この子らの心の中に、どんな思い出が残るだろう。それは大きな宝石でなくても小さな小さな貝がら、石ころであってでもいい。その子に美しいものならいい、そうあって欲しいと切に祈ったのである。それにしてもこの子ども達から何という多くを贈られた私だろうか。こちらから何もしてあげないのに、何と大きく育てられたことだろう。とありがたさ一杯の思いだった。そして思い出すには最初に担任した子ども達の修了

の日のこと。なぜあんなに涙が出て止まらなかったのだろう、と今でも我ながら訝しむ。そして、何回か重なるにつれて、はじめ程涙が出なくなるのに気づいて我心が乾いたのを嘆く思いで切なかったのである。

『育ての心』の中の、「子ども達を送る日に」で「教育」そんなことよりも、あなたを迎える朝な朝なが私の楽しみでした。「あなたの為」そんなことよりも、あなたといっしょに遊ぶことが私の喜びでした。」と。なおつつけて「ただね、今になって考えてみるとずい分行き届かないことが多かったと、それがすまないのですよ。けれどね、ごめんない、なんて、そんなことは決して言いませんよ。私の足りないことを、あなたは何とも思ったりしていないと、それが、しっかり、私にわかってるから——。」実に実に、何もかもお見通しだった倉橋惣三先生ではある。

宇宙の動きは一瞬の休む間もなく、オリオンは夜毎地平に近づいてきた。春のお彼岸頃は卒業、終業と一種の愁いをもたえた華やかなセレモニーがあちこちで行われる。

一方、子ども達の家庭環境が何かと変わることの多い三月でもある。その揺れの中で、子どもの心は、或いはおそれや不安におののくこともある。ためらいもある。嬉しい希望に溢れた経験ばかりではないだろう。桜^{はな}便りがきかれる頃、わくわくと胸躍らせてピカピカの一年生になる子ども達、大きい組になると張り切る元気な子たち、誰もがそれぞれの成長の途にしたがった育ちをして欲しいのだが……。

情報化社会ということばさえ既に古くなってしまった今日、「人間とは話す動物である」と言ったノーバート・ウィーナーの死後四半世紀を経た今、人と人との会話の間に何か固いものがはさまっているように私には思える。子どもらが人間らしい人間に、心豊かな人間に育って欲しいと念じる大人達が人間らしく生きているだろうか？「自然環境から遮断されたコピー環境で暮らしている。」と言った人があるけれどこれでよいのだろうか？

三月、子ども達の春ははじまったばかり、これからみんなみんなが輝かしい未来に向けてはばたこうとしているのだ。老婆が今更何をする 것도、しわだらけの手を差しのべることもないのではないか。ああ、子ども達をひたすら信じ、彼等を大いなるものの手にゆだねよう。

いのちふ噴く 季ときの木ぐさの ささやきを ききてねむり合う 野の仏たち

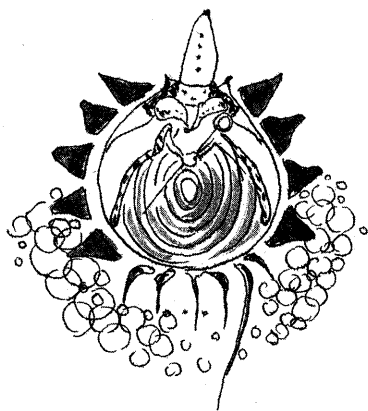
生方うぶかたたつゑ

そして、またしても思うのは陶淵明の帰去来の詩、「田園將にあれんとす、帰りなむいざ」である。子どもらのほんとうの教育を考え、自然にかえるという（ルソーのことば）意味をあらためて考えようと思う三月である。

(あとがき)

88 四月から十二回、この貴重な誌面を雑文のためにわけていただき、ありがとうございました。正直いって書くことはしゃべるよりましだと思っていましたのに、時々というより、毎回あまりの我が才能のなさにあきれ、うみ、うんざりしてしまいました。恥かしくもありました。読んでくださる方々、さぞ退屈なさったことを申しわけなくおわびいたします。終わってみて、でも、本当に沢山勉強させていただきました。文章のつくり方、まとめ方はもとより、四季おりおりの自然と人間とのかかわりについて少しは見方がかわったと思われます。子どもたちの動きやことばを見る目も深くなったとはいえないまでも視点を広げようにはなれたかしら、と思います。残り少ない我人生の貴重な一ときを与えていただきましたことを、深謝し、何かと沢山のご批判をいただきたいと心から願っております。

(音羽幼稚園)



Aちゃんのこと

伊集院理子

四月に入園してきた年中児Aちゃんは、私と目があうと、照れくさそうにニコニコと笑う表情がとても印象的な子どもでした。くせのないやさしいその笑いに、私は、何色にも染まっていない透明な心を感じました。Aちゃんは、はじめて体験する集団生活を、ニコニコしながらお友達の様子を見たり、私の後についてまわったりすることからスタートしました。そのうち、自分のやりたいことを見つけ、ある時は、活発な男の子に一人交じって砂場遊びをしたり、ある時は、他の女の子がするのを見てお面をつくったり、ある時は、お山でたくさん

お友達とかくれんぼをしたりと、ごく自然な形で、自分の世界、お友達との関係をひろげ、園生活にもなじんでいた頃のことです。

新米保育者の私は、六月の末に実習生を迎え、大人の手がある時に粘土をだしてみました。Aちゃんを含めた数人の子は、その日は粘土をやるうとしませんでした。次の日の朝、Aちゃんは、泣きながらお母さんに引っぱられるように登園してきました。そして、これまでうまくいっていた母との別れが、突如としてこの日からスムーズにできなくなりました。お母さまに事情を伺うと、昨日「Aちゃんは粘土をしないの？」と言ったのがいけなかったのでは……ということでした。お母さまのたった一言が、Aちゃんの中で、自分の思う通りにしていい良い所として定着しつつあった幼稚園のイメージを「何かをしないではいけない所」に変えてしまったのではないか。「何かをしないではいけない所」となった幼稚園は、Aちゃんには、圧力を持ってとらえられ、その圧力は、幼稚園生活に素直に開きだしていたAちゃんの心に

罫いをつくってしまったのではないか、と考えました。

いったんそういう形で罫いをつくってしまうと、粘土なら粘土という課題だけではなく、自然にとけこんでいた友達との関係にも自分から溝をつくってしまい、それを回復するきっかけがつかめず、絵を描いているお友達の背後からその頭をクチャクチャッと触って歩くというような突飛な行動が見られたりもしました。粘土をだして三日目、Aちゃんは、意を決したように粘土に触って、短い時間でしたが、こねて何かをつくろうとしていました。その日の帰り、お母さまにAちゃんをお渡しする時、自分から「Aちゃん、粘土やったよ」と報告してニコッと笑いました。

それでも、まだ、朝、母とスムーズに別られない日が続いていました。

どうしても手がある時に絵の具もやっておきたいという、こちらの都合で、粘土を三日した次の日、絵の具を出しました。その日、私が筆を洗っているのを見て、「Aちゃん、手伝ってあげる」と言って、筆を洗う手伝

いをしてくれました。次の日も筆洗いをせっせとしてくれました。その次の日、絵の具をしたい子が一通り描き終ったあと、テーブルの上においてある新聞紙の上にこっそりと筆で描き始めました。私は、じっとその様子を見守っていました。少しして、自分から、「白い紙ちょうだい」と言ってきて、集中してダイナミックな絵を二枚描きました。次の日から、Aちゃんは、前のようにお母さんと別れられるようになりました。

この一連のAちゃんの行動は、自分からやりたいと思う機が熟するのを待つことの大切さ、そして、自然な形でそれぞれの子どもが機を熟するようにするためにも、その日限りではなく、日々の保育を継続的に展開していくことの大切さを教えてくれました。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)



JAPANESE TEA CEREMONY OPEN DAY

◇ イギリス便り ◇

立教英国学院の子どもたち

その2

小野 英子

約一か月半の夏休みが終わり子ども達が帰って来た。一か月半の不在というのは、普段就寝まで見ている生活を考えると長いもので、特に成長期にある子ども達は休みを終えて、多かれ少なかれ成長して戻って来る。彼らの夏休みを知る唯一の手がかりは「日記」であり、全てではないにしろ、どんな毎日を過ごしたのかを知ることが出来る。私が今受け持っているのは五年生五人のクラスだが、当然のこと勿ら五人五様の日記を、そしてそこからわかる生活、それ以上のものを楽しめる。大体、休みになると長く、きちんとした日記を書くこともあるが、その背後関係を考えてと失笑してしま

うのだが。

五人の内男の子四人は、イギリス在住で、立教に来る前には少なくとも一年以上、現地校に通っており夏休みはその頃の友人達と会う機会でもあるようだ。

八月五日

今日は又、午前中昨日と同じことをして十一時になったら弟の現地校の友だちが来たのでいっしょに遊んだ。名前はAnthonyといって僕が現地校のときもよく遊んだ。まず外でバドミントンをしてからしばらくしてBelmontの公園に行った。そこには坂があったので思いっきりスケボーに乗った。サッカーをしたり、おにごっこをしたあと家で水風呂に入った。気持ち良かった。

元氣いっぱい遊んでいる様子が伺える。一つ気づくのは英語を縦書きにしてしまうことである。英単語などよく知っていてスラスラと綴るのだが、縦書きにさせたとき、本来横書きのままではあるはずの英語もついでに縦書きになってしまふことがある。私はここに来るまでこのような書き方を目にしたことがなかったが、この子どもだけでなく、他の子ども達も縦書きになってしまふことがある。日本の小学生だと、英語をそのまま文に登場させることは少ないであろうし、中学生だと、英語は横書きのものとして教えられ、縦に書こうとは思いつかないであろうと考えられる。

従ってこの子ども達は英語から日本語への切りかえのとき、このような自己流を発見したのではないだろうか。

七月十二日

今日、久しぶりに現地校の友達の家遊びに行きました。キックストーンというゲームをして遊びました。このゲームはかくれんぼと同じようなルールでオニを中心にして二十メートルくらい離れた所まで逃げられる遊びです。ぼくはすぐみつかってしまふけど

他の人をみつけるのはおそいのでしょっちゅうオニになっていました。三年生くらいの子を相手に必死になつて遊びましたが、とてもかないませんでした。

キックストーンというくらいだから石も蹴るのだろうがかくれんぼのような遊びらしい。日本にもイギリスにも同じような遊びがあることから、遊びとは元来、本質的なものであると改めて感ずる。

七月十九日

今日は友達のマイコーの家でビデオを見ました。マイコーは今、右足をねんざしているので、家の中でしか遊べません。一人じゃさびしいのでぼくを呼んだそうです。そのビデオはともこわくて、まだ明るい時間でもぶるぶるふるえてきました。

マイコーという友達の名前が彼の日記にはよく出てくるので、当然仲良しであろうが、立教にいる間はほとん

ど日本語しか話さない彼らがイギリス人の友人達とどんなふうにコミュニケーションをとるのか、私には想像するしかないけれども、非常に興味深い。

マイコーという名前はきつとマイケルとした方が私達には馴染みやすいはずである。この子どもの場合は、いかにも耳から入ったものをカタカナにしたように見受けられる。同様に彼は、英語を全てまず耳から自分の中にとりこんでいるであろうと察する。それは、我々が日本の教育の下で習う英語とは全く違う学び方である。文法より何より、日々の生活の中で友達との対話等から必要とされるものを学びとっていくのであろう。外国に行くにすると、子どもの適応能力に驚かされるということをよく耳にする。まだ、観念などが固定されていない時分に聴覚、視覚の触手を伸ばして新しい環境に臨むと、新しく触れたものが、柔かい素地の中にとりこまれる。英語が音として入り、それが言葉となる。言葉とはもともと音から始まり、それが文字へと進んできたものであろうから、この子ども達の学び方は自然にそうだったとはい

え、本来の流れに沿っている。自然だからこそ適応へとつながるのであらう。

男の子四人がイギリスに住んでいるのに対し、女の子一名はアルジェリアから来ている。

我が校の子ども達の多くはイギリス、ヨーロッパ圏から来ているが、中東、アフリカなど第三世界に親が駐在している子ども達もいる。とかくこのような国々は、日本から行った人々が生活するには、なかなか物資が手に入らなかったり、生活環境もままならなかったりと大変であると聞く。ヨーロッパ圏でも社会主義国は同様であるらしい。そのような事情からか、アルジェから来ていることを恥ずかしがることがあるのだが、それはおかしいことである。子ども達の間には冗談にしろ何にしろ、来ている国を理由にからかったりすることがあるが、表面的にしか捉えていないことがよくわかる。そういう国から来ている子どもたちをからかうことにより、間接的にはその国をその子達の尺度で劣っていると見なしてい

る。住んでいる国によって優越感、劣等感を持つことは全くのはき違えて、そのようなものを大人になるまで持ち続けられたら更に困る。国際感覚どころではない。折角、このような環境におり、いろんな国を知る機会を与えられているのだから、表面的なものを超えて、もっと理解を深めていってほしいと思うのである。

七月二十八日(木)

今日は、お天気もいいので父が丘の上に行つて写真を撮とらないかと言つたので、海が見えて眺めのいい所へドライブにいきました。そこからアルジェで一等のホテルなども見え、またアルジェ港には大きな船が十五艘ありました。それから、アルジェの住宅街カスバという所の中へ入ってみました。中は細い道でめいろうのようになっており、洗濯の仕方などひどいものでした。社会主義だとこんなふうになつてしまうのでしょうか。

更に彼女は、こういう所を歩いていると、ジャポネ、ジャポネと声をかけられ、石を投げられることもあるとも言っている。住んでいるとその国のいろんな部分が見えてくる。

アルジェリアの人々がどんな暮らしをしているのか、どうして社会主義国なのか、どうしてフランス語が通じるのか、独立記念塔はどうしてあるのか、を彼女は知っている。物資が手に入りにくいながらも、女中が日記に出て来たりして、アルジェリアでは良い暮らしをしているようだが、機会を有効に用いて知識を理解へとつなげられるようにと期待している。

長い夏休みは、また家族との旅行も楽しみの一つであるようだ。

七月十三日(水)

今日はウィーン郊外にあるシェーンブルン宮殿にま
ず行きました。このお城はマリア・テレジアが夏の別

荘として使っていたそうです。マリー・アントワネットがここに住んでいたかと思うと、とても興味が湧いてきます。そのあと中央墓地に行き、ベートーベン、シューベルト、ヨハン・シュトラウスなどのお墓を見ました。いかにも音楽家の墓といった感じでした。午後はケルトナー通りでショッピングをしたり、王の納骨堂を見学して夕方はブラッターという遊園地へ行き映画「第三の男」で有名な大観覧車などにも乗りました。夜はウィーン最古のレストラン「グリーンヒェンバイズル」でウィーン料理を楽しみました。

この子どもの日記を見ると、オーストリア、ハンガリー、チェコスロバキアを旅行し、ウィーンの華やかさと東欧の雰囲気味わってきたようなのだが、他の子どもたちもスイスに行ったり、スペインのマヨルカ島へ行ったり、また日本に一時帰国したりと、各々の夏を楽しんでいる。日本から見るとヨーロッパを遠く感ずるが、ヨーロッパにいとヨーロッパ諸国は実に近く、日本はま

いに Far East というのがよくわかる。だから、こちらにいとヨーロッパの国々を気軽に訪れることができるし、その地の利を活かして、子ども達は実地で地理の勉強をしているようなものであり、外国が身近なものとなる。このような機会に恵まれて幸運である。

このような夏休みを終えて生徒達が戻ってきてから、一か月以上が過ぎた。どの学期もそうなのだが、初めの一週間はたまらなく長かった。それさえ過ぎれば早いテンポで流れて行くのだが、まだベースがわからない為であろうか長く感じる。特に今学期入って来た新入生には特にそうであったろうと推し量られる。しかし、十五名の新入生達も既にかなりうちつけた。ここにいる子どもたちにとって新入生は決して「奇」なるものではない。

毎学期、何名もの新入生が加わり、又何人かの生徒が去って行くこの学校では、これらは変化であれこそすれ、すぐに日常に溶けこんでしまうものである。親

の工作上、突然帰国が決まることもある。高二、高三の場合は子どもだけ残って卒業を待つが、そうでなければ、年度が途中であっても学期終了を待つて親と共に日本へ帰る場合が多い。二学期の終わりには高三全員が受



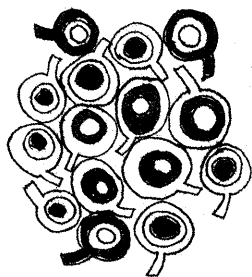
験の為日本へ帰る。学期毎に別れがある。変動の多い学校だと思ふ。それ故に子どもたちは変化に慣れているともいえる。だから新入生にとっては溶けこむのにそれ程時間を要しない雰囲気というものがある。しかし、同時に別れにも慣れているような気がする。決してそれは別れを悲しまないというような意味ではない。当事者達にとっては、別れの常であるように非常にせつないものであるが、不在に馴染むのは、又、これとは別問題であるということなのである。ここでの生活を営むにあたって、子ども達が自然に身につけた方法なのかもしれないが、上手に作用しているように思えるのである。

現在は、約一週間後に控えた文化祭（Open Day）の為、全校を挙げて（とはいえ、高三は除く）準備に大わらわである。クラス毎に展示や劇をするクラス企画では、小学生は「奈良の大仏」を取り上げ、今は二十分の一の模型作りに奮闘中である。展示説明は全て英語で模

造紙に書かれ、準備は夏休み前から始められた。生徒父兄もさることながら、地域の人々にみてもらうことを意識しての計らいである。先日は近くの街に、小学生がビラ配りに行った。確かに、地域の人々に、立教英国学院を、更には日本を知ってもらうよい機会である。その為に、学校としても非常に組織だった準備が行われている。

十月二十三日に夏時間から冬時間へと変わったので、日の暮れる時間がぐっと早くなり日毎に寒さも増して来ているが、生徒は準備に余念がない。

（立教英国学院）



自然保育



柳瀬恒男

「自然の中で豊かに育つ」をスローガンに一九六六年四月、北本みなみ幼稚園を開園して二十一年を経過致しました。

人間が自然に調和して生活していくためには、幼い時から自然に関心を持ち、身近な自然の風景や動植物等に触れたり観察したり自然と関わり、遊びを通して五感に感じ、味わうことの出来るような生き生きとした活動が望まれる訳であります。

こども達は自然の事象に興味や関心を持って、不思議

に思ったことは自分から触れたり、試したり、扱ったりして積極的に関わろうとします。それらの色々な経験や活動、遊びを通して、思考力や学習する基礎を培うような環境作りに私たちは（保育者は）取り組んでいるところであります。

この幼稚園の概要を述べたいと思います。埼玉県北本市の略々中央に位置して、

敷地面積 九九四四㎡（約三〇〇〇坪強）

園舎面積 一〇八三㎡

園児数 三六七名

教職員数 二二名

によって構成され、園庭の一部には武蔵野の面影を残す自然林があり、春の新緑の頃は一幅の絵を思わせるような萌黄色の見事な自然園、森の幼稚園であります。更に幼稚園から三キロメートル程離れた地域に幼稚園のことも体験農場として、一四八五〇㎡（約四五〇〇坪）が畑地、果樹園、牧草地、水辺の三か所に分散し、自然教育園舎には、ロバ、羊、山羊、孔雀、兎が飼育されてこ

もの園外保育の拠点として活用されています。

この地区は北本市のふるさと、自然遊歩道約三キロメートルが整備されており、埼玉自然百選の第一位に選ばれ俄に脚光を浴びている自然景観に恵まれた所です。

昨年秋に、県立自然観察公園（面積約四三ヘクタール）に指定されるとの説明がなされた地域で、本年五月十四日には「全国野鳥保護のつどい」が埼玉県で開催されます。

その早朝探鳥会には「全国野鳥保護連盟総裁」であらせられる常陸宮殿下並びに妃殿下の御出席が予定されているなど、都市近郊としては自然の形態がそのまま残っている数少ない地域として注目されている所であります。

幼稚園の四季と自然の関わりを述べてみましょう。

四月、園庭の花壇には年長児が昨秋植え付けた色とりどりのチューリップが咲いて、新入児を暖かく迎えてくれます。年長児は自然教育園近くの桜堤に進級祝いを兼ねてお花見の園外保育が恒例です。

五月、新緑の園外保育は遊歩道の水辺にオタマジャク

シすくいに大わらわ。手足も衣服も泥んこ、どんどん池の中に入って、ぬるっとした土の感触に大満足。観察ケースには、オタマジャクシの他、野の花、てんとう虫等の獲物で一杯の大喜び。クラスのケースも賑やかになります。家に持ち帰ったオタマジャクシは、どうなったでしょう。

遊歩道を暫く進んで幼稚園のレンゲ草畑に花摘みに到着する。「ウワァーキレイ、お母さんに見せてあげるの」とピンク色の花束を手手に微笑むこども達、テントウ虫も見つけた得意そうなE君、みんな幸せそうな園外保育です。

六月、緑したたる遊歩道の森林浴は、こどもたちに優しい心と自由感を満喫させてくれるにちがいありません。

また自然教育園の小梅畑では、青い葉っぱの陰に小梅を見つけ、こども達は木の下にもぐって大歓声、たちまち籠の中は一杯。園に帰ってから、よく洗い砂糖と混ぜ合わせて梅シロップの出来あがるのを楽しみに待ちま

す。これは二学期のレストランごっこでのご馳走になりました。サクランボも真赤にきれいに熟した高い枝に教師が挑戦し、こども達は落ちたサクランボを拾い集め、みんなで洗って食べて、おいしいね、の笑顔がこぼれます。

じゃがいも掘り。自然教育園のじゃがいも掘り、「あ、あった、あった」とこども達は土と汗にまみれて、懸命に掘り取り、今夜のお料理が楽しみとばかりに大張り切りである。

七月、園庭の森に、クワガタ、カブト虫等の幼虫さがしの季節になる。毎年誰が教えるでもなく、「先生、見て、」と得意になって見せに来る。こども達の目は輝いている。年長児は親元を離れて、はじめてのお泊まり保育、幼稚園より園バスにて一時間三〇分程の栃木県の山荘に一泊し、山登りに挑戦し、夜はキャンプファイヤーで楽しむ、自立への羽ばたきである。

八月、夏期休暇中の登園日恒例のスイカ割り。右だ、左だのかけ声が飛んで、やったぞ、O君の手ごたえは十

▶九月



◀十月



分。真っ二つに、「やったー」で満足顔。

九月、自然観察園の水辺にザリガニ釣りを楽しむ。篠竹の先に、さきイカをつけた糸を水辺に垂らすと、すぐに食いついてくる。手早い子は十五匹も釣ったことが、釣ってもケースに入れられない子、「先生入れて！取って！」と大騒ぎで全員成功の園外保育。

十月、さつま芋掘り（自然教育園にて）さつま芋は土の中になっっているの、なかなか掘り出せない。小さなシャベルで一生懸命だ。やっと掘り出した時の喜びの顔。お母さんへのお土産ができて、どんなお料理で、どんな会話が弾むことだろうか。

十一月、園庭の落葉を集めて焼き芋パーティー。電子レンジや調理器具を使って焼き芋が出来る事は知っていても、落ち葉で焼き芋がつくれる事は知らないことも達にとって、素朴な体験は胸をわくわくさせたようだ。お芋掘りをした時の一部を残しておいた芋を、アルミホイルに包んで焚き火の中に入れ、一時間程で焼けた香ばしい焼き芋を、手を真黒にして舌つづみをうった。この豊

◀二月



かなグルメの時代にあってもこの味は抜群のようだ。

十二月、落葉した枯野の遊歩道は霜柱でさくさく、湿田には小サギが遊んで、北国からの渡り鳥の姿も多く見受けられる。タゲリ、カシラダカ、セグロセキレイ、カモ、モズ、カケス、オオタカ、など野鳥の種類は豊富で、小鳥たちのさえずりを聞きながらの散歩を楽しむ。

一月、荒川河川敷に手製のタコを持って風上げに行くのは楽しい。こども達が走り回るので風が無くともあがる。あがるので大はしゃぎ。教師はからだ糸の調整に大忙しである。

二月、年長児は遊歩道の散策と、ロバさんに乗って幼稚園での思い出の写真撮影の季節である。年中の時のこわごわした表情と違って笑顔の記念写真である。

三月、年中児は遊歩道と児童公園コースの園外保育だが、年長児は幼稚園思い出のお別れ遠足である。幼稚園より園バスにて四〇分程で到着できる県立こども動物公園に行く。コアラ、恐竜、こどもの家がねらいどころ。以上が自然志向の園外保育のあらましである。

昨年はこんな思いがけないすばらしいチャンスに恵まれた。

幼稚園の森の松の木にツミという、タカが巣を作って、ひなを育てているのが観察出来たのである。梶野鳥の会よりツミの巣作りしているとの連絡で気づいたわけである。二階園舎のベランダから九メートルの距離に巣作りして子育てが始まったのである。二羽のひな鳥に親鳥がスズメらしき小鳥を運んで来ては与えて、遠く、近くで見守っている姿が観察できたのです。このことは七月六日、朝日新聞にも掲載されましたし、七月二十五日TBSテレビポート6時で放映されましたが、こども達、テレビ局の問いに、怪獣みたい、と答えて、観察している様子が放映され、「みえた、みえた」の大騒ぎもツミは気にもせず、日増に行動範囲を広げて飛び移る様子が、しばらくの間観察出来ました。八月に入ってから、その姿も見えませんでした。きつと高い大空に元氣よく羽ばたいて行ってくれたことでしょう。

ツミというタカは日本で最小のタカで生態系の頂点に

あるツミがいるということは他の小動物もいるという事を意味し、森が都市化して少なくなっている中で極めて貴重なことといわれている。又今年の夏も巣作りしてくれればと期待しているこの頃である。

みどりはこどもの健全な感性の発達に欠かすことのない要素であり、良い自然景観はこどもの美的感覚を培い、心に豊かさややすらぎを与え、人間性の回復と健康を促進するということである。

しかし、世界的規模では多くの国々で大変な勢いで都市化が進み、砂漠化や酸性雨などによって緑が失われているという。緑や環境の問題について、二十一世紀への豊かで潤いのある社会を形成していくための人と自然が共に生きる「ふるさと」が求められているのである。

この度、「木と森の文化史」(筒井迪夫著)に「度十公園林」宮澤賢治作が掲載されておりましたが、私は文中の度十こそ現代の緑の復興を唱った先覚者ではないかと感動せずには居られませんでした。虐げられた度十青年が自然を愛し、後世に語り伝えられる森を残してくれた

事は、正に人は唯、賢いか、賢くないか、この人の世に「だめな子はいない」と一人ひとりの生命の尊厳を覚えずにはおられなかったのである。

それらの概略を記してみると、

宮沢賢治は明治二十九年（一八九六）に岩手県に生まれ、詩人、農業技師、農村指導者、童話作家等として多方面に活躍した。しかし、その労苦の多くは報われぬまま病を得、昭和八年（一九三三）三十七年の生涯を閉じた。

「度十公園林」は彼の死後に発表された多くの童話の中の一つである。

度十という「いつも縄の帯をしめて笑っている男がいる。鳥が空高く飛ぶのや、ブナの葉が光るのがうれしくてならないが、子供らにあまりばかにされるので、笑わないふりをしている。そんな男が、たった一度、親に杉の苗木をねだり、それを一生懸命に植えた。森づくりの技術には全くうかつたが、心からスギが好きでよく世話をし、成長を見守り続けた。瘦た土地なので木の成

長はよくなかったものの、度十が丹精したスギ林はやがて大きくなり、近くの子供が集まって、うれしそうに遊ぶようになった。度十もそれをうれしがって眺めていた。

長い年月が経ち、成長して村を出ていった子ども一人が、若い博士として帰ってくる。

村は昔のおもかげをすっかりなくしていたが、度十の植えたスギの林だけは「すっかりもとの通り」に残って、子供たちも同じように遊んでいた。驚いた博士は、今さらながら自分たちが、かつて馬鹿にした度十がしたこと、賢さ、偉大さを感じる。そしてスギ林は、度十を記念した公園になり、昔の子供たちの寄附もあって立派な碑が建つ。度十自身は二十年も前に世を去っていたが、彼のスギ林はいつまでも残り「新しい奇麗な空気をさわやかに」はき出しながら「本当のさいわい」とは何かを、無数の人々に教えていくのである。

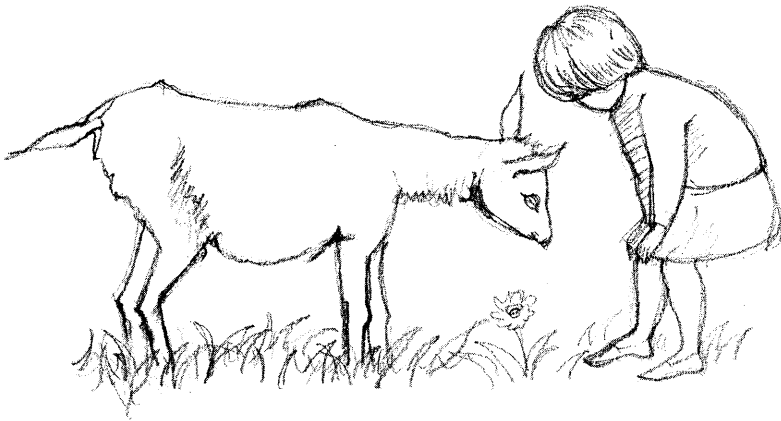
「木と森の文化史」より

この度、自然を愛し美しい事象に感動して豊かな心を

育てるみどりの環境づくりに些かでも報いられば幸いと柳瀬学園の卒園児に座右の銘として「度十公園林」を贈り、この物語を賛え広めるために自主出版しました。

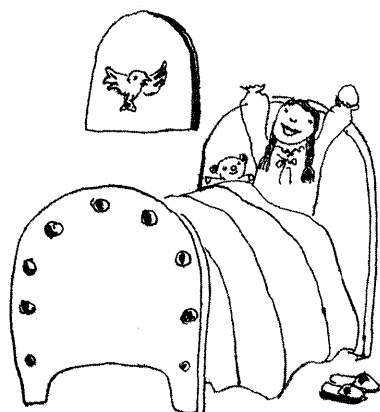
当幼稚園の自然教育園には海外研修旅行の記念に採集した、パリ・ベルサイユ宮殿庭園のマロニエ、アメリカ・セントラルパークの菩提樹、ボストン大学のオーク、ニュージーランドのピンオーク等の種子を蒔いて成長したものの外に、東京大学小石川植物園、山中寅文先生より贈られた数多くの樹種が栽植しており、将来、「北本度十公園林」と命名出来る日を楽しみにして居る日頃である。

(北本みなみ幼稚園)



***** 若いお母さんたちへ *****

日常の中から



はるにれの会

大沢 啓子

前回この欄に、私の家族のことを書かせていただいていたから、もう二年が経ちました。おじいちゃんのいなくなった生活にも慣れ、私もすっかり専業主婦にひたりきっています。毎日、子どもの幼稚園とおけいこごとの送り迎えに時間と体力を消耗し、そのこま切れの時間の合間に家事や息ぬきをしている私です。最近では、亮のしがみつくような甘ったれからも解放され、講演会やちょっとした勉強会にも行かれるようになり、少しずつ自分の時間を楽しめるようになりました。

我が家の茜と亮も小学校三年生と幼稚園の年中組になり、それぞれの生活も外へ向かって広がっているようです。

「お母さん、私、困った事があるの。どうしたらいいかわからない。」

ある日、学校から帰ってきた茜に、相談をもちかけられました。

「私、レイコちゃんとワタナベさんの両方から『オー

ちゃん（茜の愛称）は、私達二人のうちどっちが好きなの？』ってきかれるの。レイコちゃんからもワタナベさんからもきかれるの。どうしたらいいの？」

「茜はどっちが好きなの？」と私。

「それが、両方とも比べられないから困っているの。」

「どちらも好きなんだもの。」

「それじゃ、そう正直に言ったら？」

「でも、そういうと、それじゃダメだからどっちか答えてって言われるの。」

私は、レイコちゃんの方は一年生の時から同じクラスの仲良しだったので、よく知っていました。が、ワタナベさんの方はあまりよく知りませんでした。お母さんとも面識がありません。——これは困った。これと同じようなことをよくきかれることがあります。

「お母さん、亮クンと私（茜）とどっちが好き？」とか、「おじいちゃんとおばあちゃんと、どっちが好きだった？」とか。子どもは確かなものをききたがります。誰だって「あなたの方が好きよ」と言ってほしいのでし

ようが、両方とも好きという事もよくあることなのです。茜もそれはよくわかっているのです。

「どう言えばいいの、ねー。」とくり返す茜。

その日は土曜日でしたので、家にいた父親にも相談していました。良い結論は出ませんでした。

「茜ちゃん、学校の先生に相談してみたら？ 先生だったら、そういうお話し、たくさん知っていらして、いいアドバイスもらえるかもしれないわよ。」

私はここでひとまず、先生にボタンタッチして、その話から離れてしまいました。ところが、ここから先



も、茜はずーっと悩んでいたのです。

次の日、日曜日の夕方、おつかいから帰ってみると、茜が手紙を封筒に入れてあります。

「何？　これ。」

「先生にお手紙書いたの。」

「どうしてワープロなの？」

「だって私の字だと、私からの手紙だってこと、先生にわかつちやうんだもの。わかると困るの。わかるとワタナベさんとレイコちゃんが先生から職員室に呼ばれて、私も呼ばれて、三人で先生に話をきかれるから。」

この事、だれにもしゃべらないでって言われているのに、先生に相談したことバレちゃうでしょ。それに学級会なんかで、先生がみんなの前で『こういうことがあるんだけど、みんなだったらどうする？』なんて発表されちゃうかもしれないから。だからワープロでお手紙書いたの。」

文面を見ると、相手の名も匿名で、文章もきちんと書けています。最後に「先生、このことは絶対、だれにも

話さないください」と念押しの文章もあります。ご立派!!　こんなことでなければ「茜ちゃん、ワープロ、随分上手に打てるようになったのね。」とほめてあげたいところです。でも、うーん。またも考えてしまいました。そして次に、

「こんなことやめなさい。これは絶対いけない!!」茜は半べそです。

「先生だって誰が書いたかわからない手紙には答えられませんよ。匿名なんてずるいのよ。相談したいことがあるなら、ちゃんと自分を名乗るべきでしょ。これではいいかげんないたずらと思われても仕方がないことなよ。」

茜も一応納得したよう得手紙のことはあきらめ、話はまた、ふりだしにもどりました。その時、それまで黙ってみていた父親が、

「茜ちゃん、その手紙は良くないよ。それに、お友達に本当のことをはっきり言えないのは、茜が悪いんだよ。」と言いました。

「本当のことを正直に言ってもわかってもらえないのは茜も悪い。お友達だって茜がはっきりした態度をとらないから不安に思っているんだ。明日は二人のいる前で自分の気持ちを全部話して、それでもわかってもらえないなら、そんなに自分を困らせるような質問をするような二人は好きでない、そんな話しは嫌いだとはっきり言いなさい。」

これでいいんです。はじめからこれしかない答えだったのに……。母親の頭というのは、余計なことを考えすぎるのでしょね。父親のきっぱりとした助言で茜の気持ちもすっきりとしたようです。次の日、学校から帰ってきて、

「お母さん、あのこと二人に話したらわかってもらえた。よかった!!」とニコニコ報告してくれました。よかったね、茜ちゃん。

茜も「友だち」を考える年齢になってきたのですね。友だちを大切にしたいという気持ちが育ってきていたからこそ迷ったり悩んだりしたのでしょう。心をこめ

て“ひとに気持ちを伝える……言葉だけでなく本当に“心”を大切にしたいものです。

亮は相変わらず、甘ったれで、はずかしがりやで、チヨロチヨロしています。先日、ご近所のトシキンとこんなことがありました。トシキンは亮とはちがう幼稚園の年長組に通っています。とても利発な子ですが家の中で遊ぶことが多く、二人はまだ一緒に遊んだことがありません。でもお母さんとはたまにお話するので、お互いの存在はよく知っていてそれぞれに興味があるようです。

ある土曜日、幼稚園から早く帰ってきた亮は、家の前で、いつも遊んでいる小さい子たちと一緒に遊んでいました。そこへトシキンが幼稚園から帰ってきて、通りがかりにお母さん同士の立ち話となりました。子どもの方はお互いに気になるようで、牽制しあっています。トシキンが先に手を出しました。私がそれを見て「うちの亮くんはやられても泣かないよ。」と言ってしまったの

です。何とかつな、黙っていればよかったのに、あつという間のできごとでした。トシクンのチョップが亮の頭の上にきました。すかさず亮がトシクンに足蹴り二発。あわてたのは親の方です。いそいで二人を引き離し、「そんなことしないのよ!!」

瞬間のでき事でしたが、いろいろ考えさせられました。けしかけるつもりはなかったにせよ、自分で言った言葉で子ども達がすぐに行動したことに驚いているなんて、何という親でしょう。子どもが何かしようとしている時の一言、これは次の行動に大きな影響を与えます。気持ちをおさえることもあるし、はづみをつけることもあります。トシクンは何を思ったのでしょうか。私の言葉



が本当かためてみたのかもしれませんが。それにしてもあの反応のす早かったこと。二人はそれまで牽制しあつて緊張していた空気の中で、このチャンスを待っていたのかもしれませんが。親が止めなかったらもっとやって、お互いを確かめたかったのかもしれませんが。そういえばあの二人、意外にケロッとしていたな——。止めたことも私の先走りだったのかしら。でも、よその子にもシケガでもさせたら、そんな呑気なことはいっていられません。

この話はこれだけのことでしたが、あの時、あの二人はきつと一緒に遊びたかったのでしょうか。あの時、トシクンに「カバンを家において、遊びにでておいで。」と言えはよかった、せっかく遊べたかもしれないチャンス、残念なことをしました。この次は一緒に遊べるといいね。亮クン!!

何かができるようになる——これはとても大きな喜びと自信になります。それまでできなかったことが、ある

時を境にできるようになるのです。背の高さはきのうと変わらないのに、急に五センチ位大きくなったような、そんな気がして……「できるようになる」ということは、子どもにも親にも嬉しいことなのです。

亮は四歳の誕生日を迎えた時から、スイミングの教室に通っています。はじめは茜が、体が弱いので体力づくりに、と始めたことなのですが、つきそいで通っているうちに、亮も一緒に習うことになりました。

行きはじめて一年程経った頃のことです。だいぶ泳ぎらしくなってきた、クロールも25メートル泳げるようになり、進級は今日かしら明日かしら、と心待ちに練習に通っていました。ある日、練習の終わったあと、先生から、「亮クン、合格したい？」とたずねられました。先生が、そうおっしゃったということは、「合格」にしてもいいという意味なのだろうと思いますが、亮は首を横にふりました。先生はもう一度「合格したいんじゃないの？」とたずねましたが、また、はずかしそうに首をふ

り、三度目には「イヤダ!!」と言ってしまいました。そこで先生は、練習カードのその日の印の場所に◎と三重の大きな丸をく다きって、合格にはなりませんでした。帰る道々、「どうして合格になるの、イヤだって言ったの？」ときいてみると、「あのね、」ちょっと間があつて、「いやだったの」……言葉ではうまく言えません。

でもあの時の亮の泣き出しそうな顔は、やっぱり合格になりたかったのでしょう。ではどうして「いや」だったの、亮クン。「合格」の判断は、先生が決めることで、自分では決められないと思っていたのかもしれない。でも一番の理由は、やっぱり自分でも、今日は25m泳げたけれど、この次同じように泳ぎきれるかどうか、自信がなかったのでしょうか。自分自身にとってもっと確実な余裕がほしかったのではないのでしょうか。

自分でできることでも、できないと思つて、いる時には自信がありません。先生に三回もたずねられても「イヤダ!!」といつてしまうなんて、この自信のなさでは……やはり「不合格」なのでしょう。

次の日は予想通りがんばって、目標の25m四回を泳ぎきりました。言葉では言いませんでした、「今日は合格するぞ!!」と自信をもってがんばっているのがよくわかりました。もちろん文句なしの「合格」です。帰り道の亮の顔、本当にうれしそうでした。

自分でできると思えることはとても大切なことですね。

茜も一つ自信がもてる体験をしました。ひどい方向音痴の茜が、夏休みに一人で山の手線を一周してくるとい

いだしたことです。

茜は、幼い時から車で行動することが多かったせいか、家を出ると、自分が今どこにいるかよくわからなくなりです。誰かにくっついていてる時には良いのですが、これでは一人で行動できません。我家はJR駒込駅と巣鴨駅、どちらからも20分程歩いた所にあり、この二つの駅を主に利用しています。でも茜はそのどちらへも一人で行ったことはありません。一人で行ったことがなく

ても大抵の子は、何回も大人について行けば、道順ぐらいおぼえてしまうでしょう。現に、まだ五歳の亮でさえ、どちらの駅に行く道も知っています。決してむずかしい道ではないのですが、何回通っても茜の頭には入らないようです。駅からの帰り途、「ここからはどっちの道へ行ったらいいと思う?」ときくと、必ず方向をまちがえます。道とか方角とかは興味がないのかもしれない。その茜が、一人で電車に乗って山の手線を一周してきたいということです。

話しは春休みに逆のぼります。広島にいる妹の子が上京してきた時のことです。この子は茜にとっては従兄、この春中学生になったばかりのお兄さんです。急に相談がまとまり、二人で川崎の姉の家まで行こうという話になりました。私もすっかり者のお兄ちゃんと一緒なので、心配はないと二人を送り出しました。ところが、帰りの道のり、新宿駅で茜がはぐれてしまったのです。茜からの電話で、はぐれたことを知らされたのですが、かんなじな茜が、自分が今いる場所がよくわかりません。

「駅の中だけど、どこだかよくわからない。」「小田急線なの？山の手線なの？どっちの駅なの？」「わからない!!」お兄ちゃんの方は、一人でも帰ってこられますが、茜の方はだめです。「もとの場所にもどっても一度よくさがしてみなさい。」と言って一応電話をきりました。それから三〇分、ようやく連絡があり、二人はうまく会えて、もう巢鴨までもどっているということでした。こちらは連絡がないので心配していたというのに……当人たちはさっぱりとしたもので、二人で楽しそうに帰ってきました。

このことがあって、姉や妹や夫との間で、子ども達が迷子になった時、どう対処するのか、その子によって性格がいろいろあり、おもしろいという話題になりました。自分で判断し、目的までたどりつける子。案内の字が読めない子。読めても判断のつかない子。迷子になった意識があまりなく、けっこう不安なく行動してしまう子。不安ではあるが、まわりの駅員さんや大人に助けを求められる子。等々。「新宿駅の人ごみの中から一人で

帰ってこられたら、これは相当な自信につながるよ。一度、迷子にさせてみるといい。」などと、無責任な考えまで出て、話しは盛り上がりました。茜にとってはこの時のことは、不安の中にも楽しい経験だったようで、「この次は一人で行ってみたい!!」と心に決めていたようです。

夏休みも終わりに近づいたある日、いよいよ決行ということになり、茜は一人で出かけて行きました。いざその時となると、こちらの方が大きく、くどくどと持ち物や注意の念をおしたり、山の手線の駅名を紙にかいて持たせたりして、かえって子どもに笑われてしまいました。たった一、二時間でもどってこられることなのに……心配したらきりがありません。我が子の自立をさまたげているのは、私自身なのですね。そのことはよくわかっているのにそれでも心配で。こまった親です。それから一時間半ほどして「ただいま!!」と、茜は元気にもどってきました。

第一声は、「お母さんが心配するほど、たいしたこと

はなかったヨ。」ケロッといってくれるではありませんか。まあ、とりあえず、無事に帰ってこれてよかったと胸をなでおろしました。

あとになって本音の部分をききだしてみると、楽しかったというより、だいぶ緊張して電車に乗っていたようでした。

「お母さん、半分位までは、次の駅の名前ばかりが気になって、まわりの景色なんか目に入らなかったよ。」

「新橋か東京ぐらいから知っている駅の名前が出てきてほっとした。東京から駒込、巣鴨の間は、知っている駅だった。」

「知らない人に『どこまで行くの?』って話しかけられたの。だから『山の手線を一周するんです。』って答えたの。でも急に話しかけられて、ドキドキしちゃった。」

「途中で、おじいさんに席を譲ったの。」

「大きい駅はたくさん人が降りて、又、たくさん人が乗ってくるね。」等々。

「山の手線一周」……行動としては、同じ電車に乗っていれば、一周して又、元の駅に戻ってくるだけのことですが、親も子も一大決心してのイベントでした。茜はこのことで、方向音痴の汚名を返上しました。(まだ少しあやしいかな?)そして、学校や家庭では学べないたくさんさんの大切な勉強ができたことにより嬉しく思いました。

子ども達の目はどんどん外に広がっています。親の視界を越えて、自分の目で物を見るようになるのです。特に三年生の茜は、飛びたとうとするひな鳥のように羽根を広げて準備をしています。親鳥は少しずつ、そして時には大胆にひな鳥を訓練します。心配性の私には、大胆な後押しはできないかもしれません。でもせめて、暖かい巣ぐらいはととのえて、ハラハラしながらも、子ども達を応援してあげたいと思います。

♪小さな種から 芽を出して こんなに
大きくなったのか……雨の日風の日
がんばって こんなに大きくなった
のか……百年千年 ここにいて こ
んなに大きくなったのか……まだま
だ伸びていく天にもとどくまでとど
くまで♪

三月の子どもたちをみてみると、ふと
この歌を口ずさみたくなる。まど・みち
お作詞 金光威和雄作曲「おおい木」
である。

この三月、卒園をひかえた娘は、登園
時、母で口ずさんできたこの歌を、声
高らかに歌っている。春の訪れと共に、自
らの成長を感じるのか、親の欲目か、日一
日と自信に満ちてくるように思える。

私事になるが昨年十月、夫は欧州勤務
を命ぜられた。夫が先に行き、私達母子
は半年程遅れて渡欧することになった。

この充実感にあふれた娘の姿を、有難
く思う。これから経験するであろうさま
ざまな事にもぶつかっていけそうに思

う。この娘の六歳半の人生に関わって
くださった、先生方、お友達、地域の方
々、お母さまがたに、ただただ感謝の毎
日である。

清水光子先生、一年間「子どもと」を
執筆してくださり、ありがとうございました。
この一年の間に、先生は長年お住
まいになったお家を新しくされました。
そんな中で、毎月快く書いてくださり、
原稿をいただきにあげる私に、いつもに
こやかに接してくださいました。

お忙しい中でも心豊かに、優しく接し
てくださる先生から、多くのものを与え
ていただきました。いつまでもお元気
で、木や花や山歩きのおはなしをしてく
ださい。

小野英子先生から、イギリス便り2が
届きました。海外で生活する日本の子ど
も達がどんどん増える昨今、いろいろな
国からの報告をお待ちしております。

(Y)

幼児の教育 第八十八巻 第三号

三月号

◎

定価 四〇〇円

平成元年 二月二十五日 印刷

平成元年 三月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 本 田 和 子
発行人

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

TEL・二九二七七八一(代)

◎本誌御購読についての御注文は発売
所フレイベル館にお願いします

※万一製造不良の点がございましたら、おとりかえいたします。

気になる子どもたち

定価1,200円
B6判・252頁

— 幼児の精神衛生と保育 —



幼児の精神衛生と保育
気になる子どもたち

平井信義

平井信義 著



子どもの人格形成上のゆがみや遅れを発見したならば、入学前に軌道を修正したり、形成を促進することが必要と言われます。園と家庭と専門機関との協力的なとり方、保育実践への生かし方など精神衛生の知識を深めるのに役立ちます。

野辺 繁子
矢作 邦子
共著

子どもが、自由感と自己充実感をもち、自ら考え、行動することがもっとも大切なのではないか。幼児教育の原点について考える。



自由遊び再発見

野辺繁子
矢作邦子

自由遊び再発見

定価1,400円
B6判・288頁

くわしくは、フレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

保育のポイントが見えてくる。

見る目を育てる 実践シリーズ 〈全5巻〉

保育の本質をしっかり把握するためには、「子どもを見る目」、「保育を見る目」を養わなければなりません。本シリーズでは、実践例を通して、わかりやすく「見る目」を解説していきます。

- 第1巻 「子どもを見る目」
- 第2巻 「保育実践を見る目」
- 第3巻 「保育計画・形態を見る目」
- 第4巻 「保育の現在を見る目」
- 第5巻 「問題行動と障害を見る目」



編著
森上史朗（日本女子大学教授）
大場幸夫（大妻女子大学教授）
吉村真理子（松山東雲短期大学教授）

定価各1,700円・セット定価8,500円●A5判・平均228頁

くわしくは、フレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館